

## 第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

精神分析とオープンダイアログの違いは、まず何よりもそれぞれの臨床が行われる空間配置にある。

よく知られているように、精神分析の創始者フロイトは、ごく初期には対面法（治療者と患者が相對するような形で面接を行う方法）を用いていたが、のちに患者を寝椅子（カウチ）に横たわらせ、治療者はその傍らに座る、という特異な空間的配置（背面椅子式自由連想法）を用いるようになった。

このことは、精神分析が、汝<sup>なんじ</sup>と我（お前と俺）という、それなりに対等な——空間的に表現すれば「水平的」な——関係ではなく、（他者）（Autre）と主体という権威とそれに対する服従ないし反抗が生じやすい「垂直的」な関係を、治療のための原動力として用いていることを意味する。

想像してみればすぐに理解できるように、分析家のオフィスで寝椅子に横になることは、「横」になってリラックスできるというよりも、むしろ本来ならば「横」にいるはずの分析家という他者を自分の「頭上」にいるようにすることにほかならない。言い換えれば、精神分析における空間は、寝椅子に横たわることによって、人間<sup>ア</sup>どうしのごくふつうの水平的関係を人工的な垂直的關係へと作りかえているのである。

このことは当然、精神分析の過程で生じることにも関わってくる。

たとえば、転移（Übertragung）のことを考えてみるとよいだろう。転移とは、患者が幼少期において体験していた重要な他者（両親などの養育者の場合が多い）との関係が、現在時における患者と分析家とのあいだで再現されることを指す。

ひとは、幼少期において作り上げられた（特に性愛面における）対人関係のパターンをのちの人生のなかでも繰り返すことがしば

しばあるが、とりわけ精神分析においては、そのような転移（場所を転じてなされる再現）が頻繁に生じるのである。

それは、分析における空間配置が、幼少期の子どもと養育者のそれとよく似ていることも関係している。当然のことながら、いまだ直立二足歩行を身に付けていない子どもは、横たわった状態で、自分の「上」に他者がいるという空間配置のなかで人生を始めるのである。

実際、精神分析家ロバート・ウエルダー（一九〇〇～一九六七年）は、寝椅子を用いた精神分析が、助けを求めることとそれを庇護すること、内密な部分を包み隠さずに暴露すること、不安とそれを解消して安心をもたらすこと等を可能にしているという点で、「大人に対する子ども」の立場を患者にとらせていることを指摘している。

なるほど、同じく「横になる」という空間配置のなかで行われる入院や人工透析において、ときに患者に退行がみられることはよく知られているが、これもまた、本来なら水平的なものであるはずの他者との関係が、突如として垂直的な「大人に対する子ども」の関係へと「<sup>a</sup>ヘンボウする」ために生じているのだろう。自分が寝ている状態で、他者が自分の足元のほうから語りかけてくるという状況は、幼児期において養育者から世話をされている状況の再現にはかならないのである。

ここで確認しておかなければならないのは、精神分析において「横になる」ことが、単に「大人に対する子ども」の関係を人工的に作り出すだけでなく、「超越者」と、それに対する自分」という関係をも作り出すという点である。

というのは、さきほど例にあげた入院や人工透析において、他者が自分の足元から語りかけてくるのは異なり、精神分析においては、分析家という他者が頭上から語りかけてくるからである。

このことは、精神分析治療の原理とも関係している。

精神分析家ジェームズ・ストレイチー（一八八七～一九六七年）に従うならば、精神分析の治療原理は、患者が、分析家を厳しい超自我（これは患者の幼少期における養育者の権威的な像に由来するとされる）として体験することに始まり、超自我と同一視された分析家が患者に対して解釈を行うことによって、患者が徐々に過去に形作られた超自我のイメージをより抑圧的でないものへと更新することによって終わると考えられている。

精神分析において、寝椅子に横たわった患者の自我は、本来であれば水平的な他者（隣人）であるはずの分析家を、垂直方向に「上」に存在する他者（超自我）として同定することによってはじめて、自らが根底的に変化する可能性を得るのである。

ひるがえって、オープンダイアログにおける臨床空間について考えてみよう。

フィンランドで実践されているオープンダイアログにおいては、患者が家族のどちらかから病院のオフィスに電話相談が入ると、すぐさま治療チームが組織され、相談から二四時間以内に初回ミーティングが開かれる（日本ではこのような対応は現状難しいと考えられるが、今後体制が徐々に整備されていくものと思われる）。

このミーティングには、患者本人とその家族、シンセキ、医師、看護師、心理士など、本人にかかわる重要な人物であれば誰でも参加できる。これらの人々がともに集まって、車座になって座り、そこで開かれた対話（オープンダイアログ）がなされる。そして、薬物療法や入院の必要性など治療に関するあらゆる決定は、本人を含む全員が出席したミーティングで決定される。

ミーティングでは、すべての参加者に平等に発言の機会と権利が与えられ、医師などの専門家の発言に患者や家族が従わなければならないという一切ない。また、患者はゲンカクや妄想などの病的体験について話すことになるが、その病的体験は他の参加者によって頭ごなしに否定されることはなく、むしろそこに他の参加者が新たな語りを付け加えていくことになる。

こうして、ミーティングの語りは、患者の独語的モノフォニーではなく、多数の声が響きあうポリフォニーになる。このようなミーティングを、病気が改善するまで、毎日繰り返すのである。

ポイントは、精神分析において治療者と患者というふたり（だけ）の関係が垂直方向において展開されるのとは異なり、オープンダイアログにおいては、他者との関係は水平方向において展開されており、しかもふたりではなく多数の関係へと拡張されていることにある。

ただし、それはオープンダイアログが水平的な他者関係のなかだけでなされる治療法であるということを意味しない。

たしかに、オープンダイアログの出発点には「クライエントのことについて、スタッフだけで話すのをやめる」という決定的な取り決めがあったという事実からもわかるように、この治療法が垂直的な（権力的な支配―被支配の）関係を排除し、水平的な（平

等な関係によって治療を進めようとするところから始まったことは間違いない。

しかし、オープンダイアログにおいては、家族療法家のトム・アンデルセン（一九三六～二〇〇七年）らが開発した「リフレクティング（reflecting）」という技法によって、垂直的な関係がいわば「弱毒化」された形で再導入されていることがきわめて重要な点である。

より詳しく説明しよう。

オープンダイアログにおいては、まず「本人のことは本人のいないところで決めない」ことが大原則であるとされる。この原則は、治療者のうちの誰か（たとえば、医師等）が治療方針の決定にあたって患者に対する垂直的な権力を発動させないのみならず、スタッフのあいだでも患者不在の場で垂直的な権力を用いず、すべてを患者自身が参加する水平的な対話のなかで決定することを要請する。しかし、オープンダイアログの臨床空間においては、そのような水平的な空間配置のなかに、リフレクティングという若干の垂直的な関係を可能にする契機が入り込んでくるのである。

リフレクティングとは、オープンダイアログの最中に明示的に行われる専門家どうしの対話のことであり、この対話において専門家は患者のほうを眼差す<sup>まなざ</sup>のではなく、専門家どうしのあいだだけで顔を見合わせる。それは、患者の側に応答のプレッシャーを与えることを避けるためであり、さらには、そのリフレクティングを患者に観察させることによって、そのあいだに患者に自分の心のなかの声と垂直的に対話することを可能にするためである。

オープンダイアログの開発者であるセイツクラが述べているように、オープンダイアログにおける対話には、すべての参加者のあいだで行われる「水平のダイアログ」と、それによって触発された個人の内部での「垂直のダイアログ」のふたつがあり、<sup>エ</sup>このふたつの対話の協同こそが重要なのである。

たとえば、患者がオープンダイアログのなかで父親のことを話題にしたとすれば、それを聞いている他のメンバーの心の内部にも父親をめぐる連想が生じる。そのような水平のポリフォニーを通じて、個人の内部でも父親をめぐる生じる垂直方向の「内なる声」との対話がポリフォニックな仕方でも可能になる。

このような技法は、これまでの「内なる声」の哲学・思想的なモデルを更新するだろう。「内なる声」が超越的な権威として作用しないようにするための「抑え」として水平方向のダイアローグを用いること。そうすることによって個人における変容を引き起こすこと。それこそがオープンダイアローグの空間で生じる治療の原理なのである。

(松本卓也『斜め論 空間の病理学』による)

〔注〕 ○フロイト——Sigmund Freud(一八五六—一九三九)。オーストリアの精神医学者。

設問

(一) 「人間どうしのごくふつうの水平的関係を人工的な垂直的關係へと作りかえている」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「分析家を、垂直方向における『上』に存在する他者(≡超自我)として同定することによってはじめて、自らが根底的に変化する可能性を得る」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(三) 「多数の音が響きあうポリフォニーになる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「このふたつの対話の協同こそが重要なのである」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上二〇〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ヘンボウ      b シンセキ      c ゲンカク

## 第二 問

次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣大将(大将)と飛鳥井の女君は恋人同士だったが、その関係は秘されていた。以下は、飛鳥井の女君の一周忌の法要の場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

年の果てに、かの人の事せさせ給ひけり。心ざしのしるしには、何事をかはと思せば、経、仏の御飾りを、なべてならずさせ給ふ。何事も、まことに日の中に仏にも成るばかりに、思し掟てたり。その日、いたう忍びて、自らおはしぬ。講師は、山の座主なりけり。請僧六十人、七僧なども、並び居たり。

いみじう尊きにつけても、「めでたかりける人かな。この御心にかくまで思されけるよ」と、見る人多かり。さしもすぐれ給へる御さまに、泣く泣く読み給へる願文の悲しさは、袖濡らさぬ人もありがたげなるを、まいて大将の御直衣の袖は絞るばかりにもなりぬべし。さるは、「人目も心弱くや」と思し忍ばぬにはあらねど、ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留まりて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。見たてまつる人なども、「誰ならん、いとかばかり思されたりけるは。げに口惜しかりける命のほどかな」と、見おどろかぬはなし。さまざま尊き事どもは多かれど、えまねばぬは、なかなかなかひなし。

事果てて、僧も人々もまかでぬれど、自らは留まり給ひて、尼君に会い給ひて、尽きせぬあはれと思したり。入相の鐘の音ほかに聞こえたる、夕べの空のけしき、所がら、言ひ知らず心細げなるを、簾かき上げて、つくづくと眺め給ひて、行ひ給へるけしき、いみじう尊くあはれげなり。

暁にもなりぬらんとおぼゆるまで居明かし給ひて、あまり苦しければ、やがて端にうち休みて、まどろみ給へるに、ただありしさまにて、かたはらに居て、かく言ふ。

暗きより暗きに惑ふ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふさまの、らうたげさもめづらしうて、「物言はん」と思すに、ふと目覚めて見上げ給へれば、澄み上りて、月のみぞ顔に映りたりける。雲の果てまで、さやかに澄みわたりたる空のけしきを、ただの寝覚めにだに、心細かりぬべき空のけしきなれば、かたはらにまだある心地して、見わたさるれど、人は皆遠く退きつといとよく寝たり。

一人つくづくと空を眺め給ひて、泣く泣く越ゆらん死出の山路まで思しやらるるに、ただ、かの吉野の山をも後らかさんことを、恨めしげに思ひたりしけしきなど、なつかしかりしも、ただ今向かひたるやうに思ひ出でられ給ひて、

後れじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらん  
と思しやるも、枕浮き給ひぬべき心地し給ひて、経を読み給ふ。

〔注〕

○講師——法要において經典などを講説する僧。

○山の座主——比叡山延曆寺を統括する僧。

○請僧——法要に招かれた僧。

○七僧——法要で役をつとめる七人の僧。

○願文——願い事や志などを記して、仏事の際に読み上げる文章。

○尼君——飛鳥井の女君の伯母。

○入相の鐘——日没時につく寺の鐘。

○かの吉野の山をも後らかさんこと——飛鳥井の女君にはじめて出会つた折、吉野山にちなむ和歌を用いて声をかけた狭衣大将が、恥ずかしさで答えられない女君の気持ちを確かめるために、あえてつれなくしたこと。

○三瀬川——三途の川。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「ただありしさまにて、かたはらに居て」(傍線部エ)とはどういうことか、状況がわかるように説明せよ。
- (三) 「経を読み給ふ」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、直前の和歌の内容をふまえて説明せよ。

第三問

次の詩は、白居易が蘇州の知事であつた時期に作られた五言古詩「双石」である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

老	孔 <sup>あな</sup>	担	万	結 <sup>ビ</sup>	俗 <sup>a</sup>	蒼 <sup>さう</sup>
蛟 <sup>かう</sup>	黒 <sup>ク</sup>	鼻 <sup>よシテ</sup>	古 <sup>ヨリ</sup>	従 <sup>より</sup>	用 <sup>ニ</sup>	然 <sup>ぜんタリ</sup>
蟠 <sup>わだかまりテ</sup>	煙	来 <sup>きたシ</sup>	遺 <sup>b</sup>	胚 <sup>はい</sup>	無 <sup>ク</sup>	兩
作 <sup>なり</sup>	痕	郡	水	渾 <sup>こん</sup>	所 <sup>レ</sup>	片 <sup>、</sup>
足 <sup>ト</sup>	深 <sup>ク</sup>	内 <sup>ニ</sup>	浜 <sup>一</sup>	始 <sup>メ</sup>	堪 <sup>フル</sup>	石
古	罅 <sup>ひび</sup>	洗	一	得 <sup>レ</sup>	時	厥 <sup>そ</sup>
劍	青 <sup>ク</sup>	刷 <sup>シテ</sup>	朝 <sup>ニシテ</sup>	自 <sup>より</sup>	人	状
挿 <sup>さしはさミテ</sup>	苔	去 <sup>ル</sup>	入 <sup>ル</sup>	洞	嫌 <sup>ヒテ</sup>	怪
為 <sup>ル</sup>	色	泥	吾 <sup>ガ</sup>	庭 <sup>、</sup>	不 <sup>レ</sup>	且 <sup>ツ</sup>
首 <sup>ト</sup>	厚 <sup>シ</sup>	垢 <sup>こうラ</sup>	手 <sup>ニ</sup>	口 <sup>ほとり</sup>	取 <sup>ラ</sup>	醜

石	廻 <small>めぐラシテ</small>	漸 <small>ク</small>	人	窪 <small>わ</small>	五	峭 <small>せう</small>	一 <small>ハ</small>	忽 <small>チ</small>
雖 <small>モ</small>	頭 <small>ヲ</small>	恐 <small>ル</small>	皆	樽 <small>そん</small>	絃	絶	可 <small>ク</small>	疑 <small>フ</small>
不 <small>ト</small>	問 <small>ニ</small>	少	有 <small>リ</small>	酌 <small>メドモ</small>	倚 <small>よセ</small>	高 <small>サ</small>	支 <small>フ</small>	天
能 <small>ハ</small>	双	年 <small>ノ</small>	所	未 <small>ダ</small>	其 <small>ノ</small>	数	吾 <small>ガ</small>	上 <small>ヨリ</small>
言 <small>フ</small>	石 <small>ニ</small>	場	好 <small>ム</small>	空 <small>シカラ</small>	左 <small>ニ</small>	尺	琴 <small>ヲ</small>	落 <small>ツルカト</small>
許 <small>シテ</small>	能 <small>ク</small>	不 <small>レ</small>	物	玉	一	坳 <small>あう</small>	一 <small>ハ</small>	不 <small>レ</small>
我 <small>ヲ</small>	伴 <small>ニ</small>	容 <small>ニ</small>	各	山	杯	泓 <small>わう</small>	可 <small>シ</small>	似 <small>ニ</small>
為 <small>ニ</small>	老	垂	求 <small>ニ</small>	頽 <small>くづレテ</small>	置 <small>ク</small>	容 <small>イルルコト</small>	貯 <small>フ</small>	人
三	夫 <small>ヲ</small>	白 <small>ノ</small>	其	已 <small>ニ</small>	其 <small>ノ</small>	一	吾 <small>ガ</small>	間 <small>ニ</small>
友 <small>ニ</small>	否 <small>ヤ</small>	叟 <small>そうヲ</small>	偶	久 <small>シ</small>	右 <small>ニ</small>	斗	酒 <small>ヲ</small>	有 <small>ルニ</small>

『白氏文集』による

〔注〕

○蒼然——古びたさま。

○結——凝結する。

○胚渾——渾沌こんとん。天地開闢ひゃくの根源。

○洞庭——蘇州の西にある太湖に浮かぶ島。洞窟があり、湖南省の洞庭湖と地下で通じていると伝えられる。

○担舁——力を合わせてかつぐ。○郡内——公舎。○蛟——みずち。竜の一種。

○峭絶——切りたったさま。○坳泓——くぼみが深いさま。○窪樽——大きな石のくぼみを利用した酒樽さかだる。

○玉山頽——酒に酔いつぶれても風格を保つさま。○少年場——若者の集まる場所。また、その集まり。

## 設問

(一) 傍線部 b・c・d を平易な現代語に訳せ。

(二) 「俗用無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>堪 時人嫌<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>取」(傍線部 a) とはどのようなことか、簡潔に説明せよ。

(三) 「能伴<sub>二</sub>老夫<sub>一</sub>否」(傍線部 e) について、「老夫」の指すところを明らかにして、平易な現代語に訳せ。